

「第6回夏休みにみんなで作る 地域の安全安心マップコンテスト」事業報告

桐村 喬*・赤石 直美*・塚本 章宏*・村中 亮夫**・
花岡 和聖***・吉越 昭久****

I. はじめに

近年、防災や防犯など、地域の安全・安心に対する社会の関心が高まっており、地域住民が互いに防災・防犯の意識を高めるための方法として、地域の安全安心マップづくりの活動が注目されている。地域の安全安心マップづくり活動においては、行政機関や専門家の助言を受けながら、地域住民が主体となって独自に地域における防災・防犯上の問題点などを調査し、そこで得られた情報の地図化と共有によって参加者の防災・防犯意識の向上を図っている。一方で、学校現場でも防災・防犯教育の一環として地域の安全安心マップづくりが取り入れられつつあり、地域の安全安心マップづくりに関する取り組みは、全国的な広がりを見せつつある。

立命館大学歴史都市防災研究センターでは、小学生を中心とする地域の安全安心マップづくりの取り組みへの表彰とその活動および成果の幅広い発信によって、この取り組みを推進することを目指し、地域の安全安心マップコンテストを2007年から毎年実施してきた。2012年には、第6回目のコンテストとして「第6回夏休みにみんなで作る地域の安全安心マップコンテスト」を開催した。本稿では、第6回のコンテスト事業に関する概要、結果を報告するとともに、京都府主催の「地域安全マップづくり講習会」実施団体の取り組み事例を参照しながら、今後の課題についても示したい。

II. 事業概要

1 応募資格

本マップコンテストの応募資格は「小学生の個人また

はグループ」としている。また、居住地域による制限は行なっておらず、全国の小学生全学年からの応募を受け付けている。ただし、各自の居住地域などでのフィールドワークが必要となるため、マップ作成においては、その作業上の安全を考慮するとともに、保護者ととも地域域の安全・安心を考えるという本コンテストの趣旨からも、20歳以上の大人が1名以上付き添うことを条件としている。

2 課題内容

本コンテストの課題は、小学校における夏休み期間を利用して、小学生の居住地域周辺や通学路などの身近な地域の安全安心に関するマップを作成することである。作成のテーマに関しては、地震や火災、洪水などの自然災害発生時の避難経路・場所や通学時の交通安全、子どもの遊び場の安全・安心、子どもや大人からみたヒヤリハットマップなどの具体的な事例を示しつつも、地域の安全・安心に関する内容であれば自由としている。ただし、作成したマップには具体的なタイトルをつけることを条件にしている。対象とする地域のスケールや範囲は特に定めていないが、マップのサイズは「およそ画用紙二つ切以上、模造紙2枚程度以内」と定めている。これは、本コンテスト実施後の作品展示の際の都合と、入賞作品の一部を国土地理院主催の「全国児童生徒地図優秀作品展」へ推薦することを考慮してこの応募規定に準拠させているためである。

3 募集期間および広報活動

第6回コンテストへの作品応募の受付期間は、2012年8月17日(月)から同年9月28日(金)までとした。締め切りが9月下旬に設定されているのは、小学生と保護者が夏休み期間を利用してマップの作成に取り組んだのちに、作成した地図を追加で修正するなどのケースを考慮したためである。

本コンテストへの募集要項は、前回コンテストと同様に、事前に京都府内の全小学校に配布し、『GoGo 土曜

* 立命館大学衣笠総合研究機構

** 立命館大学文学部

*** 東北大学災害科学国際研究所

**** 立命館大学歴史都市防災研究センター・副センター長

塾』（京都市教育委員会生涯学習部運営）や『Yahoo! きっず』、歴史都市防災研究センターのウェブサイト上などでの広報を行なった。このほかに、夏休みの自由研究に関するコンテストを紹介するウェブサイト『ちびむすドリル』にも本コンテストの情報の掲載を依頼した。さらに、新たな広報媒体として、『Google AdSense』や朝日小学生新聞に広告を掲載するとともに、京福電気鉄道嵐山本線・北野線の主要駅にポスターを掲示した。

なお、今年度は依頼がなかったため、地域住民や小学校児童を対象とした、歴史都市防災研究センターによる安全安心マップづくりに関する講習会を開催しなかった。ただし、代替措置として、これまでの講習会で利用されてきた資料を改訂・再編集した「安全安心マップかんたんマニュアル」（第1図）を作成し、本コンテストのウェブサイトからダウンロードできるようにしている。

4 関連機関からの協賛・後援

第6回コンテストの実施に際しては、コカ・コーラウエスト株式会社、NTT 西日本京都支店、株式会社パスコからの協賛を得るとともに、国土地理院、京都新聞社、KBS 京都、京都市消防局、財団法人京都市景観・まちづくりセンター、人文地理学会、立命館地理学会、NPO 災害から文化財を守る会、株式会社白石バイオマス（以上順不同）からの後援を得た。

Ⅲ. コンテストの結果

1 応募総数

応募総数は26点であり、前回（93点）、前々回（96点）と比較して大きく減少している。ただし、京都府からの応募は7点（うち京都市から4点）であるのに対し、愛知県からの応募が10点であるなど、応募者の地理的な分布は前回よりも広がりを見せている。第6回コンテストでは、新たな広報媒体としてウェブや新聞を活用したが、応募者に対するアンケート結果によれば、新聞を情報源とした応募は1点であり、歴史都市防災研究センターのウェブサイトのみを情報源とした応募は2点であった。新たな広報媒体の利用は一定の効果を収めたと考えられるが、多くの応募の情報源が学校での配布物など学校を経由したものであることを考慮すれば、学校を経由して効果的・効率的に学校教諭や保護者に本コンテストの情報が伝わるような工夫が必要であろう。

2 審査方法・結果

2012年10月10日に審査委員会を開催し、26点の応募作品に対して厳正な審査が行なわれた。審査委員会は、文化遺産や防災まちづくり、地理情報などの学内外の専門家7名から構成されている。

審査委員会では、応募作品について、①文章・図表の表現、②目的・主題の明確さ、③独自性（オリジナリティ）、④全体の構成、⑤データの充足度、という5項目を指標として審査が行なわれた。その結果、最優秀賞1点（第2図）、優秀賞1点、入選3点、佳作6点の合計11点が選ばれた（第1表）。このうち9点について、国土地理院主催の「第16回全国児童生徒地図優秀作品展」に推薦した。

3 表彰式・作品展示

表彰式は、2012年10月27日（土）に立命館大学衣笠キャンパスの創思館で開催された「GIS Day in 関西2012」のプログラムの一環として行なわれ、入賞者に表彰状と副賞が授与された（写真1）。表彰式終了後、歴史都市防災研究センターの展示室において、受賞作品の



写真1 表彰式の様子



写真2 見学会の様子

立命館大学 歴史都市防災研究センター
あんぜんあんしん
安全安心マップ かんたんマニュアル

2012年度版

ステップ2 野外調査

必要なもの: 4色ボールペン、筆記またはクリップボード、地図、ふせん、デジタルカメラ

4色ボールペン クリップボードと地図 デジタルカメラ

〇犯罪が起きやすい場所や地震や洪水のときに危ない場所を探しながら、町を歩いて歩く
★交通事故やけがに注意しましょう

〇危ない場所を地図にメモする
▼その場所の近くにはふせん・シールをはる
▼4色ボールペンで色分けしながら、どうして犯罪が起きやすいのか、どうして危ないのかということを書き込む(種類ごとに色分けするとわかりやすい)

〇写真を撮る 地図にはりつくと、その場所のようすがわかりやすくなる
▼全体の写真: 危ない場所の全体像がわかる写真
▼ピンポイントの写真: 「危険があつて危ない」など、危ない場所をわかりやすく説明する写真
その場所を知らない人に、どういった写真を撮ったらわかりやすいか考えながら撮りましょう

地図にメモする 写真を撮る

立命館大学 歴史都市防災研究センター
あんぜんあんしん
安全安心マップ かんたんマニュアル

2012年度版

ステップ3 地図をつくる

①横断線に道路や川を画いて、白地図をつくる
②野外調査で調べたことをまとめて、地図に書き込む(情報を強志)
▼情報を種類ごとに分けておく
(たとえば・・・▼危ない場所、▼安全な場所)
③地図に印をつける・情報の種類ごとに色や形をわける
(たとえば・・・▼危険な場所をみどり、▼安全な場所をピンク)
色鉛筆・色マジック・ドットシールで色分けするとわかりやすいよ
④発見し: 一目でその情報がわかるようにかく
(たとえば・・・通行が不利)
⑤説明: どんな危険なのか詳細に説明する内容をかく
(たとえば・・・事故が多い交差点、自転車で飛び出すととても危険)
⑥写真: その場所のようすがわかる写真を貼る

立命館大学 歴史都市防災研究センター
2012年度版

メモ
ふせん

写真
調査用の地図

ステップ4 地図を見せる

〇わかりやすい地図になっているかを考えよう
〇自分の経路や聞いた話だけでなく、他の人に想像を聞いてみよう(自分が気付かなかったことがわかるかも)
▼一緒に歩いたお母さんやお父さんと話し合ってみよう
▼地図を見せて想像を聞いたら、地図に新しい情報を追加してみよう

編集・発行: 立命館大学歴史都市防災研究センター
発行日: 2012年7月10日

RITSUMEIKAN

立命館大学 歴史都市防災研究センター
2012年度版

地域の解説 タイトル 危ない場所

色分けの説明 調査用の地図

第1図 安全安心マップかんたんマニュアル



第2図 最優秀賞受賞作品（左）と優秀賞受賞作品（右）

第1表 受賞作品

受賞内容	学年	タイトル
最優秀賞	4	さい害対さくと救えん活動
優秀賞	6	安心安全津波てんでんこMAP
入選*	3	わたしの通学路 安全マップ&震災の時の逃げ道
	3	私の通学路安全安心マップ&震災の時はどう逃げるの? どこへ逃げるの?
入選	4	手作り防火防災マップ
入選	2	高知えきまわりのバリアフリー安心安全マップ
佳作	4	わたしの町のケンケンマップ
佳作	3	安全安心べんりれきしもあるよほくの町六地藏
佳作	1	安全みまもりマップ
佳作	4	私の通学路 安全MAP
佳作	4	私の地域の安全マップ in 中条~佳良木団地
佳作	4	ほくの地いきの安全マップ

※同一家族による作品

見学会を実施し、受賞者によるマップの解説・紹介と、受賞者・保護者および関係者による記念撮影が行なわれた（写真2）。入賞作品と応募作品の一部は、同展示室において、2012年12月21日（金）まで展示された。

IV. 地域の安全安心マップづくりに対する意識

本コンテストへの応募にあたっては、アンケートへの回答を応募者をお願いしており、地域の安全・安心に対する意識や地域の安全安心マップづくりの活動の効果などについて調査している。ここでは、応募者から得られた17件のアンケート結果をもとに、地域の安全安心

マップづくりに対する意識について整理する。また、2012年11月に実施した、京都府がこれまでに開催してきた「地域安全マップづくり講習会」の実施団体に対する、地域の安全安心マップづくり活動に関するアンケートの結果を利用し、地域住民の団体という視点からの地域の安全安心マップづくりに対する意識についても示す。

1 応募者アンケートの回答者の属性

回答者（保護者）の多くは女性であり（64.7%）、年齢層は40歳代が最も多い47.1%で、50歳代（23.5%）、30歳代（17.6%）と続いた。参加した小学生の学年別の内訳をみると、社会科授業の一環として取り組んだ例のあった4年生が最も多い75.4%となった一方、1年生や

2年生は少なかった。

2 地域の安全安心マップに掲載すべき情報

地域の安全安心マップに掲載すべき情報（12項目からの複数選択）として、多くの回答者は「交通事故」をあげている（70.6%）（第3図）。次いで多いのは「地震」（47.1%）であり、「交番・消防署」（41.2%）、「子ども110番の家」（41.2%）、「大雨・台風」（35.3%）、「声かけ・不審者」（35.3%）、「避難場所」（35.3%）の順に続いている。前回および前々回のアンケート結果によれば、自然災害そのものに関する事項よりも、災害発生時に必要となる情報や、防犯等に関する事項を重視している傾向がみられたが¹⁾、今回の結果では、「地震」や「大雨・台風」のような自然災害そのものに関する事項も重視されていることがわかる。東日本大震災などの地震災害だけでなく、突発的・局所的な大雨による被害などへの関心が高まっていることを背景にしているものと思われる。

3 地域の安全安心マップづくりの意義・効果・問題点

アンケート結果によれば、地域の安全安心マップを作成する意義として、以下の回答のように、保護者と小学生との情報の共有や地域の安全・危険の再確認を図ることができる点などが指摘されている。

- ・危険な場所や気をつけなければいけない場所を再確認できた。
- ・子供と安全安心を考えた上で地域を歩きまわると、新しく知ったことや、再確認できた事柄などがありました。
- ・親子で通学路を一緒に歩き、気づかなかったことが

見え、お互い確認することができた。

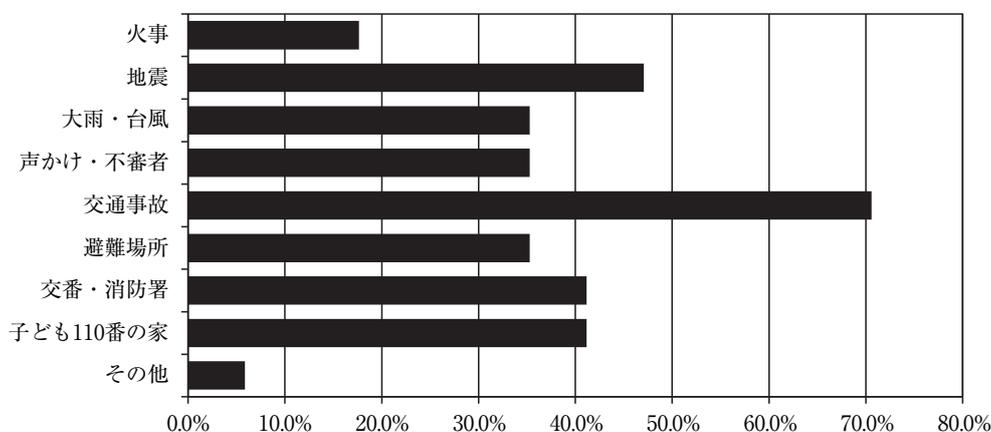
- ・普段何気なく生活している地域をマップを制作することにより、より深く知ることが出来たと思います。出来上がったマップを見ながら親子であれこれと安全安心について話す機会ができました。

また、すべての回答者が今回の調査およびマップ作成を通じて、回答者および小学生がもつ地域の安全・安心に対する関心が高まったとしている。一方で、地域の安全安心マップを作成することの問題点として、以下の回答のように、マップの作成によって安心してしまうことによる油断、危険への対応に関する学校や教育委員会の考えとの整合性など、災害や危険に直接関係する点のほか、情報の正確性や個人情報に関する危惧も指摘された。

- ・安全安心マップを作成したという安心感で反対に油断をしてしまう危険性があるように思う。
- ・教育委員会や学校がどう考えているのか、現段階では聞かされていない。自分たちの安全行動がこれでもいいのかということがなかなか評価されない。
- ・個人情報をごとまで記入するか（地図などを同時に作成する為）。
- ・もし自分の家が古くて危ないのを極力近寄らないようにとか、家族に不審者がいるとかの誤情報が流れたら困る。

4 地域の安全・安心に対する取り組み

地域の安全・安心に対する取り組みとして重視している活動について回答（12項目からの複数選択）を求めたところ、「地域内での情報の共有」（70.6%）や「学校での防災・防犯教育」（58.8%）、「家庭での防災・防犯



第3図 地域の安全安心マップに掲載すべき情報（複数回答）

※12項目の選択肢のうち、「豪雪」、「ひったくり」、「転倒の危険」の回答はなかった。

教育」(29.4%)の回答が多かった(第4図)。地域の安全・安心マップづくり活動は、これらの活動の範疇に含まれると考えられ、実際に行なわれている活動についての回答(同様の12項目からの複数選択)でも、「地域内での情報の共有」(35.3%)、「学校での防災・防犯教育」(47.1%)、「家庭での防災・防犯教育」(52.9%)という比較的高い回答率となった。これら以外で、実際に行なわれている活動として回答の多かったものは「住民によるあいさつ」(58.8%)、「住民によるパトロール」(47.1%)などであり、前回とほぼ同様の傾向を確認できた²⁾。

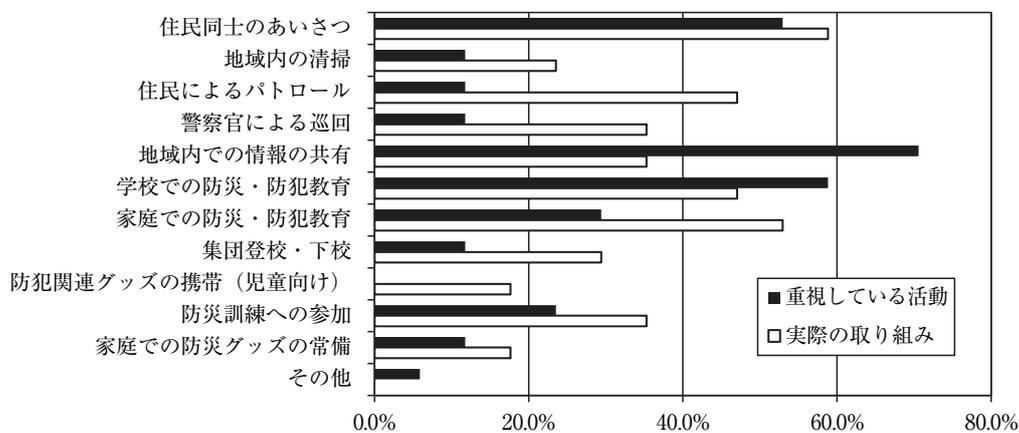
5 地域住民の団体活動としての地域の安全安心マップづくり

地域の安全・安心に対する取り組みとして、実際に、地域の安全安心マップづくりの活動はどのように行なわれているのだろうか。本コンテストへの応募者に対するアンケートからは、そのような実態を推し量ることはできないが、2012年11月に実施した京都府主催の「地域安全マップづくり講習会」の実施団体へのアンケート調査結果から、地域住民の団体活動としての地域の安全安心マップづくりの状況について示す。なお、これまでに同講習会が実施されてきた14団体のうち、調査に協力していただけたのは1団体のみであり、ここに示す状況は、この団体(以下、A団体とする)のケースになる。また、この団体が行なっている地域の安全安心マップづくりに関する活動(以下、マップづくり活動)は、主として防犯に関するものであり、必ずしも防災を含んだものではない。

A団体は、60歳代以上の住民で構成されており、

2006年頃からマップづくり活動を始めている。マップづくり活動を始めたきっかけとして、京都府主催の地域安全マップづくり講習会の開催や、交通事故や犯罪の多発などの社会的な不安の増大があげられている。A団体でのマップづくり活動には、小学校の教員を含む大人と小学生が携わっており、京都府主催の地域安全マップづくり講習会の実施以降、1年に1回程度の頻度で地域安全マップの更新を行なっている。このように、A団体では、小学校との協力の下で、2006年頃から継続的にマップづくり活動が行なわれており、地域住民の団体活動としてマップづくり活動が定着しているといえる。一方、小学生自身が認識できるマップの作成が必要と感じているものの、学校との調整が難しいことが課題となっているなど、マップづくり活動にある程度慣れてきた団体ならではの課題もあげられている。A団体は、ある程度継続的にマップづくり活動を行なっており、今後もマップづくり活動に関する講習会があれば参加する意向を示していることから、地域の安全・安心に対する意識が非常に高いと考えられる。

A団体の状況を考えれば、地域の安全安心マップづくりの活動を継続的に進めていくためには、個人や地域住民の団体の自発的な活動だけでは難しく、地域の学校などとの連携を図っていく必要があると思われる。本コンテストの活動としては、例えば、学校や地域住民の団体との連携の度合いも作品の評価基準の1つに取り入れるなどして、その連携の推進を支援していくことができるだろう。また、本コンテストに関連する歴史都市防災研究センターの活動として、学校だけでなく関連する地域住民の団体も交えた、地域の安全安心マップづくりの



第4図 地域の安全・安心に対する取り組み(複数回答)

ための講習会事業も考えられる。

V. おわりに

本稿では「第6回夏休みにみんなで作る地域の安全安心マップコンテスト」事業の概要および結果を報告するとともに、2つのアンケート結果の分析から、地域の安全安心マップづくりに関する意義や地域住民の活動としての状況について整理し、本コンテストおよび関連する活動の今後の方向性の一端を示した。

本コンテストは開始から6回目を数えたものの、その重要性・必要性は依然として高く、歴史都市防災研究センターの活動の1つとして本コンテストの事業を推進する必要がある。ただ、地域の安全安心マップづくりの活動をより広く社会に普及させていくためには、本コンテスト事業や地域の安全安心マップづくりに関する講習会の実施だけでなく、地域住民の団体活動との関係などに関する社会学的な分析や、子どもによる危険の空間的な

認知に関する地理学・心理学的な観点からの分析など、地域の安全安心マップづくりを支援するための学術的な研究活動も積極的に展開していく必要がある。

〔付記〕本事業は、立命館大学歴史都市防災研究センター主催の事業として、文部科学省グローバルCOEプログラム「歴史都市を守る『文化遺産防災学』推進拠点」（代表：大窪健之）の支援を受けた。

注

- 1) ①中村琢巳・赤石直美・塚本章宏・花岡和聖・村中亮夫・吉越昭久「歴史都市防災研究センターによる小学生を対象とした防災教育の取り組み——「第5回夏休みにみんなで作る安全安心マップコンテスト」の事業報告——」、京都歴史災害研究 13、2012、43～48頁、②赤石直美・塚本章宏・花岡和聖・村中亮夫・吉越昭久「第4回夏休みにみんなで作る安全安心マップコンテストの成果と今後の課題」、京都歴史災害研究 12、2011、43～47頁。
- 2) 前掲1) ①。

